

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁶²

「私たちに何の関係があるの？」という声がすでに深く引き寄せている関係性

04年9月1日に起こった北オセチア学校占拠事件を契機に、「チェチェン問題」に少しだけ触れてきた。ほんの少しだけ。もちろん、わかったという実感はほとんどない。学校占拠事件をはじめ、多くの事件が解明されないまま、深い闇に閉ざされたままであるのと同様に、私のなかにも多くの疑問と謎が渦巻いたままである。どうして第二次大戦中にスターリンは、ロシア革命に際して赤軍のボリシェヴィキに協力して、ツァーリの白軍と勇敢にたたかったチェチェン人を強制移住させる過酷な処罰を行ったのか。ソ連邦解体時にチェチェン人が、すかさずロシアからの独立を宣言した理由はなにか。なによりもロシア軍の圧倒的な軍勢力を前にして、チェチェン人が独立を諦めずに最後まで抵抗しつづける根拠は一体どこにあるのか。そうした疑問に私はまだ深く覆われているが、「チェチェン問題」にかかわる書物にいくつか目を通すなかで、しだいに疑問が氷解しつつあるのを感じ取っている。

アンナ・ポリトコフスカヤの『チェチェン やめられない戦争』の巻末に収録されている論考、ノースウェスタン大学社会学部助教授ゲオルギー・デルルーギアンによって論じられている『何が真実か？』は、大変簡潔に私が抱いている疑問に一つの解答を示してくれる。筆者はまず冒頭でこのようにいう。チェチェンを知ることは、ポスト共産主義東ヨーロッパにおける地獄の片隅についてだけではなく、私たちが生きている世界全体にかかわる重要な何かを学ぶこと にほかならない、と。いうまでもなくチェチェンという見知らぬ小国でなにが行われていようとも、テレビで知っているイラクで相変わらずの爆撃が日常的に行われているのを遠く眺めているのと同様に、私たちのいま・ここの生活になんの影響ももたらすものではない。すべてが無関係である。無関係な海のなかに、私たちはただ単に漂っているだけのことなのだ。

なぜ、「チェチェンを知ることは、.....私たちが生きている世界全体にかかわる重要な何かを学ぶことになる」のか。この「チェチェン」という言葉をイラクやパレスチナ、あるいは私がまだ向かい合っていない多くの問題に置き換えても、成り立つにちがいない。私たちは関係につながれている以上に、膨大な無関係にこそつながれているのではないか。「私たちが生きている世界全体」は、無関係な回路を私たちにむかって開いているだろう。ポリトコフスカヤは前著のプロローグで、次のような問いを発している。

私は何者か？ そして私はなぜ、第二次チェチェン戦争について書いているのか？ と。新聞記者として自分はチェチェンに派遣され、ひどい戦争に巻き込まれているチェチェンの一般市民がどんな目に遭っているかを、同じ一般市民としての立場から取材し、

記事にすること、「それだけのこと」と記す。

彼女は99年夏から、毎月チェチェンに通ってきた。文字どおり、私はチェチェン全土を縦横にくまなく歩き回った。そして、多くの悲しみを眼にしてきた。その最たるものはこの二年半に私が取材してきた人たちの多くが、今はもう死んでしまったということだ。この戦争はそれほどひどいものだ。このひどさは、まるで中世そのものではないのか。20世紀が21世紀になろうという時に、しかもここはヨーロッパだというのに、時間は暗黒の闇のなかに閉ざされたままである。彼女はそのなかに踏み入ったのである。そう、もう部外者であることはできなかった。ひどい戦争は当然、彼女の身にも降りかかってくる。戦争に巻き込まれているチェチェンの一般市民の惨状を取材するということは、自分も同じ戦争に巻き込まれながら被らざるをえなくなる、自分の身に対する惨状をもって見聞し、彼らに接すること以外ではありえなかった。

ポリトコフスカヤが取材中にどのようなひどい目に遭ったのか、については、「死を賭して報じるチェチェンの悲劇」(『現代』04・11)のなかで、こう語っている。

日々怯えながら暮らすチェチェン人にとって、自分の受けた虐待体験を私に語ることすら命懸けです。ロシア軍が密告を奨励しているからです。

かくいう私も、2001年2月に、第45空挺連隊に逮捕され連行された経験があります。何と私は、この空挺連隊の司令官の取材を終えた2分後に、そのまま逮捕されたのでした。

私は畑の真ん中で1時間以上、直立不動の姿勢を命じられました。その後、装甲車に乗せられ、将校に銃床で小突かれながら、「お前の身分証明書は偽物だ。本当はジャーナリストじゃなくて女戦士だろう」などと怒鳴りつけられました。

彼らのキャンプに着くと、所持品をすべて没収され、何時間にもわたる尋問が始まりました。名前も名乗らない若い将校たちがつぎつぎにあらわれ、自分たちの司令官はブーチンだけだ、とほのめかしては、私の子どもたちの写真を手にとって脅迫するのです。

尋問のもっとも汚らしい部分はお話しできません。口にするのもおぞましいからです。最後は中佐が、「お前を銃殺する」と宣告し、私を暗闇の外に連れていき、銃を連射しました。そして恐怖でしゃがみ込む私を見て、大喜びするのです。

その後、暗闇の階段で、「下は風呂場だから服を脱げ」と命じられました。私が無視していると、「てめえ、逆らう気だな。女ゲリラめ!」と激しく罵られました。そのまま地下壕へ押し込められ、出されたお茶を一口飲むと激しく吐きました。そして兵士たちが監視する中でトイレに行かされたのです。ようやく地下壕から解放されたのは、翌朝のことでした。

続けて、ロシア軍がチェチェンでこのような蛮行の限りを尽くしても、罰せられることはまずありませんと記しているが、チェチェン人が「自分の受けた虐待体験」を彼女に語ることすら命懸けであったなら、彼女が取材することすらも命懸けであったことを、彼女が逮捕されて連行され、おぞましい尋問を受けた先の記述は物語っていたの

である。おぞましい尋問を受けただけでなく、(悪質なからかいである)銃殺を宣告されて、暗闇の外で銃が連射されるという恐怖を味わわされながらも、彼女は自分の取材から一步も退かなかったし、チェチェンの一般市民にかかわりつづけた。

「恐怖でしゃがみ込む」彼女がひるまない筈がなかったし、自分の子どもたちのことを考えるなら、命懸けの取材に改めて足がすくむ思いに何度も駆られただろう。おそらくその度に彼女は、自分が直面した恐怖の体験ですら、チェチェン人たちが日常的に味わい尽くしている戦慄の滝のような虐待体験と比較すると、なにほどのことでもないという思いに突き動かされていたにちがいない。だいいち、「この二年半に私が取材してきた人たちの多くが、今はもう死んでしまっ」ているのに、自分は現にこうしてまだ生きているではないか、という実感をおそらく彼女は噛みしめながら、チェチェンの地獄に足を運んでいたのではなかったか。そんな彼女であったからこそ、04年9月1日に起こった北オセチア学校占拠事件にある役割を潜ませて駆けつけようとして、機内で毒を盛られる事件に見舞われることになったのだろう。

ポリトコフスカヤにとって「チェチェン問題」を取材することは、取材を通して自分の身に降りかかってくるさまざまな災厄に対するたたかいにほかならなかった。つまり、災厄をもたらさずにはおかない取材を通してしか、「チェチェン問題」を取材することなどできなかったのだ。ここで彼女にとっての取材が、安全地帯にいる部外者として渦中の当事者に接近し、多くのことを聞き出そうとする類の取材などではなく、取材するほうもされるほうもお互い命懸けであるという、切羽詰まった状況が共有されるなかでの、その状況の共有自体がなによりも取材そのものにほかならなかった。彼女はチェチェン人たちを取材するのと同じ比重で、自分自身をも取材しなければならなかったのである。だから彼女の記事には、チェチェン人たちが申し掛かっているだけでなく、彼女自身も申し掛かっていた。

いろいろな人びとが編集部には電話をかけてきたり、手紙を寄こして何度も同じ質問をする。「どうしてこんなことばかり書いているんです? どうして私たちを怖がらせるの? 私たちに何の関係があるの?」と。

私は書かなければならないと確信している。理由はただひとつ - 私たちが生きている今、この戦争が行われている。そして結局私たちがその責任を負うのだから。その時にこれまでのようなソ連式の答えで逃れることはできない。そこにいなかったから、メンバーじゃなかったから、参加していなかったから.....などと。

知っておかなければいけない。真実を知ればみんな、居直りとは無縁になれる。

そうすればロシア社会は、ますます速度をまして引き込まれつつある人種差別主義の泥沼から自由になれる。

そして、コーカサス(カフカスとも言われる)で誰が何をしているのか、そもそも現在そこで英雄などというものが有り得るのかについての、せっかちで恐ろしい個人的な判断からも自由になれる。

ポリトコフスカヤの「チェチェン問題」に関する報告（著書）に対して、いろいろな人々が電話や手紙で、「私たちに何の関係があるの？」といいながらも、無視したり素通りできないのは、自分たちに深く関係していることに気づいているからである。「どうして私たちを怖がらせるの？」というわけだ。だからこそ彼女は、「私は書かなければならないと確信している」のである。コーカサスにロシア軍を送り込んでいるのがロシア政府であり、そのロシア政府に政治を委ねているのがロシアの人々であるなら、コーカサスでロシア軍が行っていることに目を向けるのは当然のことであり、真実を知るのは自分たちロシア人の義務であるし、こんなひどい戦争をやめさせることができるのも自分たちロシア人ではないのか、と訴えているのだ。自分たちロシア人が無関心でありつづけるかぎり、悲惨な戦争に終止符が打たれることはない。そのことに自分たちロシア人は責任を負わなくてはならない、というのが彼女のスタンスである。

ではロシア人ではない、「チェチェン問題」に縁も縁もない（ようにみえる）他国の人々、たとえば日本人である私なら、あえて知らなくてもよいし、知る必要もないことなのであるか。「私たちに何の関係があるの？」といえることなのだろうか。「真実を知ればみんな、居直りとは無縁になれる」とポリトコフスカヤがいうのは、彼女と同じロシア人に対してである。ということは、真実を知っても日本人の私は、「居直りとは無縁になれ」ないということだ。そもそも日本人の私には真実を知ると否とにかかわらず、「居直り」が生じてくることもないほど「チェチェン問題」は遠く、無関係である。だが、果たしてそうか。確かに日本人の私には、「チェチェン問題」に深くかかわっているロシア人が無関心や無関係を装っている「居直り」は免れているけれども、日本人でもなければロシア人でもないところでの、ただチェチェン人も日本人も同じ人間であるという場所で発生しているかもしれない、知らないが故の、知ろうとしないが故の「居直り」に付きまといわれないとはいえない。

こう自問するとき、「知る」ということも同時に問いに突き刺されている。「知る」とはなにか。なにを知ったら、知ったことになるのか。「チェチェン問題」について知るとは、一体どういうことであるのか。彼女は、ロシア人たちは真実を「知っておかなければいけない」と書き刻んだ次に、『チェチェン やめられない戦争』でこう報告している。

2002年、夏がそこまで来ている。第二次チェチェン戦争が始まって33か月になる。この絶望的な戦争に終焉の兆しはどこにも見えない。「掃討作戦」は絶えず行われており、まるで異教徒を無差別に火刑にしているかのような様相を呈している。拷問は普通に行われ、裁判なしの処刑は日課のようになっている。争乱に便乗した略奪は日常茶飯事。ロシア連邦軍兵士によって誘拐された人びとは、生きていれば奴隷取引、死んでしまえば遺体取引の対象にされているというのが、チェチェンのありふれた日常になっている。

1937年当時のように（スターリン体制下のソ連で粛清の嵐が吹き始めた年）「人間」がある夜忽然と消息を絶つ。

切り刻まれ、誰のものとも判別のつかなくなった遺体が毎朝のように、村はずれで発見される。夜間外出禁止時間になってから捨て置かれたものだ。これで何百回、何千回めになるだろうか、私は、子どもたちが、自分の村の人がどんな姿で発見されたか言い合っているのをまた聞いている。今日も、昨日も……。耳をそがれていたんだって、頭の皮をはがれていたんだって、指が切り落とされていたんだって……。

別の個所では、ロシア連邦軍の絶え間ない空爆によって街が破壊され、家並みが碎け散るか炎上し、人々は殺戮され、逃げのびた人々は難民となって 自らの運命が葬られていくのを見つめるという、苛酷な拷問に立ち会わざるをえなくなる光景が記述されている。更に他の個所では……。この世でのありとあらゆる災厄が束になってチェチェンの人々を襲っている場面を、彼女の書物から知ることができる。ところで、そうしたチェチェンの惨状を知って、どうなるのか。「どうしてこんなことばかり書いているんです？ どうして私たちを怖がらせるの？ 私たちに何の関係があるの？」というロシア人たちの質問が、ここでもう一度甦ってくる。私たちロシア人は自分たちの政府が行っていることを知らなければならない、とポリトコフスカヤは確信をもっている。目を背けてはならないと彼女がいうとき、それはロシア人にむかって発しながら、その枠を超えてロシア人ではない日本人の私にも強く迫ってくるのが感じられる。

いうまでもなくそう感じ取るのは「私」であって、他の誰でもない。ポリトコフスカヤにしても、あくまでも自分と同じロシア人にむかって発しているだけのことかもしれない。しかし、そうであるとしても、目を背けてはならないという彼女の訴えは、弓から放たれた矢のように一直線に「私」のなかに突き入ってくる。ロシア人とか日本人とかの線引きを飛び越えて、「私」にむかって押し寄せてくる。もちろん、「私」がそう感じるのである。では、「私」はどうしてそう感じるのか。そう感じなくてはならないのか。それは「私」にははっきりしているように思われる。ひどい戦争に巻き込まれてなす術を失っているチェチェンの人々が、大惨事の渦中からどこかにむかって手を差し出しているのが、いや、こちらにむかって手を差し出しているのがくっきりと見えてくるからだ。差し出されている彼らの手を邪険に振り払うことなど、誰にもできるものではない。

ほとんど知られていない「チェチェン問題」について取材する彼女の著作もまた、ほとんど知られていないだろうが、「チェチェン問題」を知るために膨大な書物の中から彼女の書物を選び分けて手にする行為そのものが、あるいは逆に、彼女の書物を偶然か必然か手にして「チェチェン問題」を知るようになっていくプロセス自体が、チェチェン人の窮状から差し出されてくる手にこちらの手を重ねようとする仕草にほかならないだろう。もちろん、それは幻想的な行為であり、自分の見えないところにむかって手を突き出している当のチェチェン人自身には全く実感が伴わないどころか、彼ら自身 ^{あすか} 与り知らない彼方の出来事だが、彼らにむかって手を差し出さずにはいられなくなっている惨憺たる現状に見舞われつづけている以上、彼らの手を受けとめる幻想的な行為が、幻想的な行為としてとどまったままにあるとは必ずしも限らない。というより、あらゆる

出来事が幻想的な行為のプロセスを経ることが不可欠となっている筈なのだ。

「知る」こととはなにか、という問いに直視されてきたが、「知る」ことは傍観することではなくて、踏み入ることなのだ、ということである。だが、どこへ、踏み入るのか。チェチェン人が苦しんでいる場所であり、彼らの苦しさは容易には届かない「私」の苦しさが立っている場所である。いいかえると、チェチェン人の苦しさを遮っている「私」の苦しさに「知る」ことは踏み入る必要があるし、何度も何度も「私」の苦しさに踏み入ることによって、チェチェン人の苦しさが寄り添ってくるようになればよいのだ。「私たちに何の関係があるの？」という反撥はそのとき、関係を必死に求めて手をこちら側に差し出しているチェチェン人の苦しさが、「私たち」にみえているかどうか、みえるようになるかどうか、という問いに変換されているだろう。関係を強く求めるそこに、関係は生まれてくるし、生まれなくてはならないのである。

プーチンは、クレムリンにいて国際的な「対テロ作戦」同盟の中心的存在として世界の注目を集めている。2002年5月、ブッシュがモスクワにやって来た。「歴史的訪口」を果たし、友好国であることをアピールした。しかし、チェチェンについてはひと言も触れることなく、まるで戦争などないかのごとくふるまった。

私は支援を求めて世界の主要都市をかけずり回った。春にはアムステルダム、パリ、ジュネーヴ、マニラ、ボン、ハンブルク……どれも「チェチェンの現状についてのスピーチを」との求めに応じて行ったのに、成果はまったくなかった。「チェチェンでは毎日人びとが死んでいます。今日も例外ではありません」と訴える私の言葉に、西側の人びとは「お行儀よく」、拍手で答えるだけ。

この事態は明らかに、人道に対する、世界全体の裏切りである。半世紀にわたって維持されてきた世界人権宣言も、この第二次チェチェン戦争で地に墜ちてしまった。

ジュネーヴで、だだらとめりはりのない国連人権委員会の「人権擁護」会議に出席したあと、私はチェチェンの主要都市のひとつウルス・マルタンに飛んだ。そこは血の匂いがする、どんよりとした気配に包まれていた。一年前とまったく状況は変わっていない。「死の軍団」 - どの部局に属するのかわからないが、「ロシアの敵」を殲滅することが課題である特殊部隊 - がわが物顔にふるまっている。

石油が絡んでいるイラクと異なって、石油が絡んでいない（とはけっしていえないのだが）チェチェンに対する「世界の無関心」がやはり凄まじいことをポリトコフスカヤは報告するが、「対テロ作戦」を掲げてアフガニスタンに激しい空爆を行い、その次にイラクに対する先制攻撃を予定していたにちがいないブッシュが、「チェチェンについてはひと言も触れることなく、まるで戦争などないかのごとくふるまうのは当然であったのだ。イラク攻撃がまだ始まっていない、9・11の興奮が世界を包み込んでいる段階での彼女には、（いや、私たちだってそうであったのだが）「自由と民主主義と人権」の先進国からロシアにやって来たブッシュが、「チェチェン問題」に全く触れないことは怪訝な面持ちであったのだが、「チェチェン問題」に折り重なる「イラク問題」が後

に浮上することを考えれば、ブッシュがプーチンに「チェチェン問題」を口にできる筈がなかったのである。

ポリトコフスカヤはブッシュのアメリカ以上に、隣接しているヨーロッパの人々のあまりの冷淡さに対して、「この事態は明らかに、人道に対する、世界全体の裏切りである」と憤るが、ブッシュの再選に対して「アメリカが大衆レベルから腐り始めた」と手厳しく評価していたフランスの人類学・歴史学者エマニュエル・トッドが、『グッドバイ！アメリカ』（『論座』05・1）のなかで一言、チェチェンという語を口にしていたのが想起される。「ブッシュ再選を歓迎したのはロシアのプーチンとイタリアのベルルスコーニだ。あなたは『帝国以後』で独仏の連携にロシアが接近するシナリオを描いていたが」と訊かれたトッドは、こう答えていた。

「ナイブにものを見てはいけない。ロシア人は、アメリカの深い願望がロシアの解体にあることを知っている。核戦略でアメリカの向こうを張れる対抗軸は世界を見回してもロシアしかない。米露間の核の緊張が続いている以上、アメリカがロシアの弱体化を望むのは当然だ。アメリカ政府はグルジアやコーカサスの他の地区での活動を通し、チェチェンのテロリズムを支援している。しかしロシアには時間を稼ぐ必要があり、いちいち挑発にのるわけにはいかない。ブッシュの反テロ戦争の言説はプーチンにとって今のところ都合がいい。」

「チェチェン問題」に関してとんでもない認識が示されているとあってよい。「アメリカは世界の混乱と無秩序の要因になっている」とトッドが指摘するのであれば、彼はロシアもまた、「世界の混乱と無秩序の要因」をかたちづくる危険性について、「チェチェン問題」を取り扱うなかでどうして見通すことができないのだろう。アメリカ政府が「チェチェンのテロリズムを支援している」などということは、少なくとも私の目に触れた、「チェチェン問題」に関する記述や資料のどこにも見当たらない。もちろん、ポリトコフスカヤの書物のなかにもない。トッドが独自のルートからそのような情報を得ているのかどうかは知らないが、それにしても彼の「チェチェン問題」に対する取り扱い方は、あまりにもアメリカに対抗するヨーロッパとロシアの協力関係という大局的な情勢のなかに埋没させられており、そこでは「チェチェン問題」は窒息させられている。

トッドの言述には、「チェチェン問題」を取り上げることによってロシアを追い詰めるようなことになれば、ブッシュのアメリカを利することになるから、アメリカとの対抗上、ロシアの力を必要とするヨーロッパはロシアの国内問題に干渉することによって、ロシアとの協力関係を削ぐようなことをしてはならない、という国際戦略上の観点が窺われる。「チェチェン問題」などで足を掬^{すく}われてはならない、ということなのだ。目を見開かされることの多い、気鋭で才気あふれるトッドだが、「チェチェン問題」を敢えてみないようにする彼のロシア理解には異を唱えておかなくてはならない。「アメリカ倒産のシナリオ」を描いてみせるなら、同様にロシア倒産のシナリオを描いてみせる必要もあり、「イラク戦争は、あらゆる戦争と同様、『悪の教育』として組織されたという

ものだ。悪の教育の目的は、平和な人間を、暴力の行使、それも弱い者に対する暴力の行使に慣れさせることにある」というのであれば、同じことをチェチェン戦争に対してもいわなくてはならないだろう。

「イラク戦争を通して大衆向けの悪の教育は功を奏し、アメリカ国民はブッシュを再選させることでこの非対称戦争の不名誉を進んで引き受けた。しかし、この悪の教育はヨーロッパ人には効かなかった。スペインではアメリカを支持した政権が選挙で倒れ、スペイン軍は撤退した。ハンガリー軍の撤退も予告され、イギリスでも反戦気分が高まっている」、ヨーロッパ人はそうやすやすとアメリカの魂胆には乗せられないといわんばかりのトッドの口調だが、片方の目でイラク戦争を見詰め、もう片方の目はチェチェン戦争を睨^つっているのが、ヨーロッパ人ではないのか。アメリカのイラク戦争に協力しないというヨーロッパ人の反戦気分の高まりは、ロシアのチェチェン戦争にむかつては傍観者的な気分の高まりとしてしか発露されないのだ。それはトッドの見方にあらわれているように、ヨーロッパ人がアメリカとの対抗関係のなかでしか物事をみなくなってしまっているから、「グッドバイ！ロシア」がどうしてもいえないのである。

ポリトコフスカヤが「チェチェンの現状についてのスピーチを」求められて、ヨーロッパの主要都市をかけずり回ったのに、「成果はまったくなかった」。自分の言葉にヨーロッパ人が「お行儀よく」拍手で答えるだけのおざなりな事態に対して、彼女は「明らかに、人道に対する、世界全体の裏切りである」と怒りの声を挙げるが、しかし、世界全体はいつも人道に対して裏切ってきたのである。世界はこれまでも、これからもずっと「不完全」であり、「不公正」でありつづけるのを私たちは噛みしめなくてはならないのかもしれない。同じ規模の死傷者であっても、イラク戦争がニュースで取り扱われる裏面でチェチェン戦争は隠されつづけるのである。イラク戦争に慣れっこになってしまっている私たちは、チェチェンやアフリカのスーダンでずっと続いている戦争で、大多数の死傷者が連日生じているのに、報道されないということにも、したがって知らないということにも慣れっこになってしまっているのだ。

私たちは要するに、生きていることに慣れっこになってしまっているのである。だから、テレビの画像に映しだされている戦闘シーンを見ても、凄惨な戦争被害が映しだされても、また新聞記事での活字を通してそれらのことに触れても、すべては映像や活字の世界における出来事にすぎず、目を泳がせる術をすでに私たちは身に着けてしまっている。そして本当はなににも知らない癖に、知った振りを装っている。この虚飾を剥ぎ取らないことには、私たちは「知る」どころか、「知る」ということに向かい合うことさえできない。虚飾を何枚も剥ぎ取っていけば、そこに私たちの一糸もまとわない「裸体」が浮上してくる。この「裸体」においてすべてのコトに当たるなら、身を切ることの「痛さ」というものが募ってくる筈である。そのとき、「知る」ということは「痛さ」を伴うことに気づくにちがいない。「知る」ことは忘れても、「痛さ」のほうは記憶され、堆積されていくからだ。

第二次チェチェン戦争は放置されたまま、今のような状態になってしまった。何度も自分に言い聞かせた。「余計なことに首を突っ込むんじゃない。おまえには関係ないんだから。もっと大事なことがあるだろう……」という類のことを言われても信じてはいけない、と。

チェチェンでは何にでも首を突っ込んでかかわらなければいけない。何でも命がけのことだから。今日はほかの人の命でも、明日はわが身がやられるのだ。

このポリトコフスカヤの言葉の底には、自分に関係のないことなど世界にはありやしない、困難な関係はいつも「関係ない」こととして自分に差し迫ってくるのだから。他人の身に及ぶことはいつか自分の身に及ぶことである、という透徹した把握がそこに鳴り響いている。「チェチェンでは何にでも首を突っ込んでかかわらなければいけない」ということは、徹底してかかわらなければ命取りになるということであり、「命がけ」としてやらなければ他人の命は当然のこと、わが身の命すら救えないということだ。だから彼女は「明日はわが身がやられる」という前段で、こう書き付ける。

「チェチェン」という名をつけた特別事業によって国全体が墮落させられてしまい、ますます感覚を鈍磨させつつ社会は残虐なものになってきている。ロシアでは人間の命の値段がそれだけでなく極度に低かったのに、今ではそのまた何万分の一にも落ちてしまった。まさにだからこそ戦争の停止が私たちすべてにとって命と同じほど大切なのだ。私たちロシアの者は、救出されずに水底で非業の死をとげた原子力潜水艦「クルスク」号の乗組員たちと同じく、致命的などん底にいるのだ。しかも、救出の命令は相変わらずないまだ。

チェチェンの人々を、国を蹂躪しつづけるロシアの「国全体が墮落させられてしまい、ますます感覚を鈍磨させつつ社会は残虐なものになってきている」というのであれば、それは自業自得であり、自らの愚行の重みでロシアは沈没させられつつあるといわざるをえないが、彼女の報告が痛切な思いに駆られるのは、ロシアの国全体の墮落や感覚の鈍磨や社会の残虐さがチェチェンにも明らかに覆い被さってきているからだ。ロシアのチェチェンに対する蛮行は辛いことに、チェチェンの人々の間での蛮行としても彼ら自身を蝕んでいる。彼女は一色刷りの版画のなかに押し込められているような、難民のハジマート・ガンビーエヴァを取り上げている。腹がふくれ、関節の腫れ上がったかさかさの老婆は、中間色もなくまるで白黒が描かれているようだった。羊皮紙のような皮膚に黒い皺がきざまれていた。痩せて突っ張ったような鼻がもうひとつの黒い線になっている。とんがった頬骨が黒く隈取られ、首は、吊ってくれと言わんばかりの容貌として彼女を描写する。

ハジマートはとても重い病気だ。だいいち彼女は実のところ老婆などではない。下の娘はわずか13歳、本人だって51歳だ。ハジマートを版画のようにしてしまった病気というのは単なる栄養失調だ。慢性的な飢餓。

献身的なハジマートは11人からなる家族の母親であり、祖母であり、すべてを子ど

もや孫たちに与えてしまう。りんごは4人の小さな孫たちに。その子たちは飢えと寒さで結核が再発していた。小麦粉が支給されれば、パンを焼くようにと未婚の十代の娘たち、嫁たちに与えてしまう。

チリ・ユルトに逃げてきたばかりの頃、一家にはお金があった。娘たちは順番に耳飾りを市場に売りにいった。長男が小さなテレビを売ったお金でしばらくは暮らせた。そのテレビは焼け出される時、唯一持ち出せた物だった。だが、そのお金も底をついてしまった。

「将来の希望は？」

「何もないわ。また今日を生き延びただけ。アラーの思し召しで」。ハジマートはまるで息をするのを助けるかのように首に手をやって答えた。「助けはどこからも来ない。私たちは少しずつ死んでいるのよ。長男だって歩くのがやっと。食べる物が何もない。下の女の子は昨日飢えで気を失ったわ。難民キャンプの隣人たちは何で気絶したのかわからないというふりをしていた。その人たちにはパンと紅茶があったのに。私には匂いでわかった。人びとは獣のようになってしまったわ」

戦争が始まって一年が過ぎようとする頃には、その影響を隠すのは不可能になっていた。昨年冬には、イングーシの巨大な難民キャンプにさえなかったような、絶望的な飢えと救いようのない結核が猛威をふるい、チェチェンの人びとは急速にその民族の精神を失っていった。その冬、多くの難民が私たちロシア人に投げたせりふは、「こんなことで負けるものか。どんなに私たちを圧迫しようと。私たちは団結しているんだから。それが力なんだ」というものだったのに、今はまったく違う。キャンプの片隅で誰かの袖を取り、密かに口にするのは、「もう、我慢できない。私たちはオオカミだ。お互いに対しても」という言葉だ。

ポリトコフスカヤは更に続ける。

飢えた群衆の別のグループはその頃、食品加工工場の閉めきった鉄の扉に突撃をしかけている。まったくびくともしないと、今度は、怒りが群衆の中に向けられる。人びとは馬鹿馬鹿しいようなことをわめき合う。刺し殺してやる、吊してやる、首をちょん切って、食べ物にしてやる……と。

何のために「吊してやって」「ちょん切ってやる」のだろうか？ それは、ただ、少し前にいる者がほんの半時間ほど早く、缶詰のコンビーフを食べられるからというそれだけだ。人間的な感覚が失われている。心が壊れてしまった。古来のチェチェン精神がここではまったく打ち砕かれていることに気づかざるを得ない。人びとは踏みつけられ、戦争と飢餓によって、ただれてしまっている。こういう彼らを見て、その人たちとつき合っていると、これまでの歴史で数多くあった試練を耐え抜く鍵となっていたあの有名な民族の強さはどこにも見つけられない。遠く離れた場所で活躍するチェチェンのビジネスマンが同じ民族の不幸な人びとに、その富のほんの十分の一でも与えようとする姿はまったくない。

チリ・ユルトの難民キャンプ生活で横行している、チェチェン人の売春婦の飛躍的な増加や未成年の子どもたちの売り飛ばしなどの恐ろしい話を聞かされたポリトコフスカヤは、「同胞」であるからというだけで敢然とかばおうとするあの一枚岩の民族は、今や神話の世界に行ってしまったのだろうか？ と嘆き、 どうしてこんなことが起きてしまったのか？ と問う。事態の責任が誰にあるのかは問うまでもなからう。ナチスのアウシュビッツ強制収容所で囚人から選ばれた監督者「カポー」が、ナチスの監視兵よりもずっと残酷に仲間の囚人を迫害した所業が想起されるが、人びとが人間としての正気を保ちつづけるのはとても難しい なかで、彼女は自分もまた、 この第二次チェチェン戦争によって墮落させられてしまっ ていることをごまかさずに見詰める。自分が墮落することまで引き受けた上で、彼女はチェチェンにかかわりつづけているのだ、「命がけ」で。

「どうしてこんなことばかり書いているんです？ どうして私たちを怖がらせるの？ 私たちに何の関係があるの？」という声がまたもや鳴り響く。彼女だけでなく、もはや私もその声に向き合わなくてはならないだろう。「こんなことばかり」が起こっているかぎり、書きつづけなくてはならない、と。そして、あなたがたがもっと本気になって「怖がる」ようになるためにも、書くことは「怖い」ことや厭なことにどんどん突き入らなくてはならないのだ、と。自分に関係がないと思われる事態のほうから、あなたに最大に関係が迫られていることにも気づく必要がある、と。「命がけ」は「命がけ」以外のものとは連帯しない。彼女がロシア人の女性ジャーナリストとして取材でチェチェンの地を訪れた、というきっかけをはるかに超える「命がけ」の行為を指し示しているのが感じられるとすれば、それは彼女にとって読み書きの行為が消費の次元にけっして収まらずに、その行為を通じて「知る」ことが自分の足元に火が付いているという感覚に直結しているからだろう。

自分の足元に火が付いているという感覚を些かも「知る」ことが喚び起こさないとするなら、それほど鈍感になっているとするなら、「知る」ことが何の力にもなりえないものであるなら、私たちはもう一度根底から生き直さなくてはならないし、人間としての根性を鍛え直されなくてはならないだろう。

なんというひどい戦争にはまりこんでしまったのだろう。誰もが人生を狂わされ、どんなことも一瞬にして終わってしまうかもしれない。この戦争にかかわりを持った人の誰ひとりとして、いつどこで誰に会えるか確信が持てない。誰かからよろしくと頼まれたら、一分も無駄にはできない、明日ではもう遅すぎるかもしれないのだから とポリトコフスカヤは書き、「2002年12月」の日付けを刻んで、2002年が終わりつつある……私たちは2003年を生き抜けるのだろうか？ と自問しながら、私には肯定的な答えはない。そしてすべての悲劇はいつでも私たちを待ち構えている と、自分の書物を差し出す。

2005年1月30日記

